NEWSLETTER

VUV・SX 高輝度光源利用者懇談会　2006 年 6 月 No.15

会長あいさつ

東京大学物性研究所　教授
辛　埴

このたび、大門寛会長の後を受けて、今年度から２年間、VUV・SX 高輝度光源利用者懇談会の会長を勤めさせていただくことになりました。大変難しい時期に会長になりましたが、私なりに精一杯努力しますのでよろしくお願いいたします。

第３世代の軟Ｘ線・真空紫外高輝度光源の必要性が叫ばれていながら、東京大学は同計画の中止を決めました。この件に関する詳しい説明は、このニュースレター中に柿崎施設長から説明があります。大変残念ですが、個人的にはこの件に対する東京大学小宮山総長の勇気ある決定を感謝したいと思います。やむを得ない周囲の諸事情にもかかわらず、計画の推進をこれ以上続けることは科学の発展にとって実りある事とは思えません。物性研究所を中心とした第３世代の軟Ｘ線高輝度光源の建設計画は既に１０年以上も続けており、この分野の多くの研究者は個人的な研究を犠牲にして計画の推進に捧げてまいりました。そのために、軟Ｘ線・真空紫外科学の疲弊は、この間、かなり進んでいます。サイエンスを発展させるために始めた高輝度光源計画が、この分野のサイエンスを一時的にも停滞させてしまったことに歴史の皮肉を感じます。

真空紫外・軟Ｘ線領域の科学では、海外に大きく遅れは取っているものの、一部の分野では海外に比べても著しく進んでいる分野があります。例えば、高分解能光電子分光や軟Ｘ線・硬Ｘ線光電子分光の分野は日本が非常に進んでいます。これは、日本におけるサイエンスの底力を表しています。既存の放射光施設や真空紫外レーザーなどをうまく利用しさえすれば、海外を圧倒するサイエンスを達成することができるのです。

日本には HiSOR、SPring-8、UVSOR、PF と数多くの放射光施設があります。それぞれのリングを組み合わせれば、ビームラインや実験施設の数は、十分ではないにしてもかなりのことができると思っています。４つの施設を組み合わせて協力すれば、真空紫外・軟Ｘ線領域の全てのエネルギーをカバーできます。しかも、老朽化が進んでいるはずの UVSOR や PF は、施設側の努力による改造により、海外のリングに引けを取らなくなっています。

今回、東京大学放射光連携研究機構が進めようとしているいわゆる「放射光アウトステーション計画」はこの様な、各放射光施設の資産を最大限に利用して、真空紫外・軟Ｘ線領域の科学を推進しようとするものです。この放射光アウトステーション計画については、このニュースレターの中に尾嶋機構長の方から詳しい説明があります。具体的なことはこれから決めないといけませんが、私は、この計画は、時代にタイムリーであり、現状にも合った計画

と考えています。本懇談会としては、この放射光アウトステーションを今年度以降の活動の中心に置きたいと考えています。この方針については、先日行われた懇談会幹事会によって支持されました。詳しくはその議事録をご参照ください。

高輝度光源計画は、これまで様々な局面があり、実現寸前まで行ったと言われた時期もありました。しかし、今更、惜しかったことを言っても仕方がありません。様々な事情や理由にかかわらず、高輝度光源計画が推進できなかった理由の一つに、他分野の人達に、この分野のサイエンスの有用性を説得できなかった事が大きな理由の一つだと思っています。このまま現状を放置すると、サイエンスの遅れはますます決定的になってしまいます。こういう状況になった現在、高輝度光源建設を横目でにらみながらも、真空紫外・軟Ｘ線領域のサイエンスの有用性を極める事が我々の世代に課せられた課題であると思っています。

今年度の懇談会の活動方針としては放射光アウトステーション計画の推進の他にも様々なことがあります。まず、規約の改正を行う必要があります。規約には「高輝度光源計画の推進」とありますが、既にその計画の中止を決定した現在、現状に即した規約に改正する必要があります。また、現在会員が６００人以上います。これも、やはり、現状に即するように名簿の改訂を行いたいと思います。

放射光アウトステーション計画は、これからいろいろなことを決めて行かなくてはなりません。懇談会としては、会員の皆様、東京大学、物性研究所、シンクロトロン放射光各施設と力を合わせて、日本の真空紫外・軟Ｘ線科学の発展のために、よりよいものとしたいと思います。

＊＊

東京大学の高輝度光源施設計画の中止について

柿崎明人（物性研究所・軌道放射物性研究施設長）

物性研究所・軌道放射物性研究施設（SOR施設）は、これまで極紫外・軟X線領域の放射光を利用する研究者ばかりでなく物質科学研究に携わる数多くの分野の人々の期待を担い、さまざまなご協力をいただきながら柏キャンパスに極紫外・軟X線領域の高輝度放射光源を備えた施設（高輝度光源施設）を建設・整備する計画を推進してきました。

一方、東京大学では、昨年4月の新執行部発足を機に総長室のもとに検討ワーキンググループを設け、物性研究所を中心とする全学プランとして推進してきた高輝度光源施設計画について、施設建設の必要性、実現可能性などについて具体的な検討を行ってきました。その結果昨年10月、現状では一国立大学法人である東京大学が高輝度光源施設を独力で建設し維持することは財政上困難であること、また他機関からの強力な援助を得る見通しが立たないため、総長室としては施設建設計画を中止せざるを得ないとの判断が示されました。東京大学は、全国の関連研究者の協力のもとで進められてきた準備活動の学術的資産を全国の関連研究者に還元し、高輝度放射光利用研究の一層の推進をはかるため

に、放射光連携研究機構を組織し、既存施設の利用を軸とした新しい計画を推進することとなりました。現在、そのための準備を進めています。

高輝度光源施設計画の中止については、昨年11月に物性研究所が行った外部評価委員会でも議論されました。評価報告書の中では、上記ワーキンググループの提言に沿って、既存施設に極紫外および

軟X線領域のビームラインを建設すること、コミュニティとの対話を通じてSOR施設の活動計画を立案することなどが述べられています。SOR施設は、新しい計画の中で高輝度放射光を利用するビームラインと実験設備を建設・整備し、物質科学研究を飛躍的に発展させることを目的として先端的研究を行うとともに、全国共同利用を推進してまいります。

各位のご理解とご協力をお願いいたします。

＊＊

東京大学放射光連携研究機構の設立について

尾嶋正治

（放射光連携研究機構長、東京大学大学院工学系研究科）

東京大学は長年の懸案となっていた柏キャンパス高輝度放射光源施設建設について小宮山総長の就任を期にその必要性実現可能性について検討を行いました。放射光利用研究の重要性などの観点から施設の必要性については再確認されたものの、主に財政的な理由から建設計画を中止せざるを得ないとの結論に至り、昨年１０月にその方針が決定しました。これまで培ってきた研究資産を活用するために、既存施設に高輝度放射光ビームライン（東大放射光アウトステーション）を建設して放射光利用研究を推進することとなりました、という方針に変えました。これまで高輝度光源の建設を目指して活動してきたものとして大変残念な決定でした。それを受けて新しくアウトステーション WG が設けられ、私が世話役に指名されました。この WG には SPring-8 と PF から 2 名ずつ参加して頂き、合計15名で5回のWGを開き、熱い議論を重ねました。東京大学の研究科長・研究所長会議、および総括委員会で「東京大学放射光連携研究機構」の設立が認められ、5 月 1 日に機構が発足しました。この機構には生命科学部門と物質科学部門が設けられ、それぞれ若槻客員教授（物質構造科学研究所教授）、柿崎教授が就任しました。機構開設シンポジウム（柿崎実行委員長）を 6 月 21 日に武田先端知ビルで開催いたしますので、多数のご参加を期待しています。

この機構の設立理念は、「世界最高の高輝度放射光を用いて生命科学、物質科学における最先端サイエンスを展開し、卓越した研究成果を出し続けて世界をリードする。また、これらを体系的に行うことによって生命科学と物質科学の融合、シナジー効果によって新しい研究分野を創出する。」であり、基本方針として、

１）世界最高輝度の特色ある「東大ビームライン」を作ってこれを機構の中核とし、既存施設ビームラインを活用する「連携ビームライン」と併せて「東大放射光アウトステーション」として上記ミッションを達成する。

２）原則として、アンジュレータなどの基幹的インフラは東大の概算要求、あるいは東大資金で建設し、実験装置については外部資金を戦略的に獲得して設置する。

３）物性研が担ってきた「VUV/SX 全国共同利用」は、PF、SPring-8 の共同利用制度のもとにこれを継続する。

とうたっています。

ビームラインの具体的な建設については、

SPring-8 や PF と密接な連携を取りながら進めていくことが必要で、現在両施設との合意書締結を進めています。特に物質科学では、SPring-8 の長尺アンジュレータに軟X線ビームライン(CからSiのK 吸収端までをカバー)を建設し、①マイクロ（ナノ）ビーム高分解能光電子分光、②光電子顕微鏡・ナノ分光法、③発光分光、④コヒーレント分光（軟X 線ホログラフィなど)、の４研究テーマを行うことを最優先課題と位置づけています。また、PF に９ｍアンジュレータを導入して VUV から SX までの高輝度放射光を取り出せるブランチビームラインを建設し、⑤表面化学・表面物理の研究、⑥コンビナトリアル材料研究、を行うことを計画しています。この他にもビームラインを所有している機関との連携（XMCD など）を計画しており、最先端サイエンスを展開する中で全国共同利用を行っていきたいと考えています。この放射光アウトステーションでは、数～10 年後の新しい次世代光源に引き継いでいけるサイエンスと若手人材を育むことを最も大きなミッションだと考えております。

財政的に厳しい現実を見据えながら、是非世界最高のビームラインを作ってすばらしい研究成果を一緒に挙げていきたいと考えていますので、引き続きご支援を賜りますようお願い申し上げます。

＊＊

Super SOR 計画の中止にいたる２年間の懇談会活動を振り返って

大門　寛（奈良先端科学技術大学院大学）

平成 16 年度、17 年度に高輝度光源利用者懇談会の会長を仰せつかり、高輝度光源の実現に向けて粉骨砕身の努力をいたしてきたつもりですが、時の利有らず、国の財政状況や周辺の状況がいかんともしがたく、東京大学としては計画を中止することになり、残念の極みであるとともに会員の皆様にも申し訳ない気持ちで一杯です。今から考えれば違う戦略があったかと思いますが、当時は実現に向けて最善の方法と思われるものを推進してきたつもりでした。その間の経緯につきましては懇談会の皆様には報告ができませんでしたので、突然の中止のお知らせとなり、納得できない方が多いことと存じます。懇談会として、この間にどのような活動をしてきたかについてご説明申し上げたいと思います。

平成 16 年度初頭の高輝度光源計画を取り巻く状況は、歴代の懇談会会長と皆様のご努力により文科省にも重要性は認識していただいており、放射光学会としても後押ししており、KEK、東北大、東大の３者の話し合いも済み、財政状況と東大の意思決定次第で実現も可能ではないかという状況（実際には違っていたかもしれませんがそのような状況判断）でした。維持費・土地問題・建設費用という三つの課題が大きくのしかかっていました。これに対して、これまでのような研究会などを通したユーザーのアクティビティーの維持向上と一般へのアピールの他に、KEK との協力関係の再構築、東大内部の活動の活発化、建設場所に拘わらない計画実現

要望などを懇談会の活動方針として決定しました。

4月には私と柳下先生が小間物構研所長と会見して協力をお願いしました。5月上旬には小宮山東大副学長（現総長）に、私と上田物性研所長、尾嶋先生が早期実現要望書を提出して懇談を行いました。小宮山副学長は、柏キャンパスの中核的研究施設として今後も申請は続けること、しかし予算規模が大きいために予算枠組みの検討が必要であることなどを話されました。実現のためには学内の支持、コンセンサスが必要で、理学系での強い支持はもとより、バイオやナノのユーザー層を広げる必要があり、理学だけでなく、工学や医学の研究科長が支持を表明すると良い、との意見をいただきました。この結果を踏まえ、その後は東大内、特に医学系のコンセンサスを得るための活動を活発に行いました。東京大学放射光科学推進懇談会と拡大戦略会議で戦略を練り、東大内のバイオ関連研究者の支持を広げるために7月に放射光シンポジウム「極紫外・軟X線高輝度光源が切り拓く次世代の生命科学」を東京大学放射光科学推進懇談会と共同で開催しました。バイオでは、X線構造解析が主となるため、リングのエネルギーを少し高くして短周期アンジュレータを用いるなどの改良案が示されました。ナノのユーザー層を広げる研究会としては、4月に短期研究会「LEEM/PEEM を用いた表面研究の新しい展開」を協賛し、12 月には吉信計画委員長を中心に短期研究会「高輝度放射光を用いた先端科学研究と新たな展開」を開催しました。また、放射光学会でも間瀬幹事が中心となり企画講演を行いました。

平成17年度には、小宮山先生が総長となられ、小宮山アクションプランに高輝度光源計画が盛り込まれるかどうかが焦点となりました。拡大戦略会議でバイオシンポの計画を立て、5月には私と上田物性研所長、柿崎先生、尾嶋先生、藤森先生で廣川医学部長を訪問し、協力をお願いしました。また、６月には、私と尾嶋先生、藤森先生、柿崎先生でPF 執行部と会談を行いました。７月には、浅島先生、C. Jacobsen 先生、A. P. Hitchcock 先生、仁田先生、真島先生、木原先生、廣川先生に講演をお願いし「高輝度光源による先端的バイオ研究シンポジウム」を開催しました。浅島先生と廣川先生にも好意的に重要性を認識していただき、東大学内のコンセンサス作りには一応成功したと思います。

しかしながら、このような情勢を踏まえて8月から9月にかけて上田物性研所長にSuper SOR 計画の実現を要請していただいたにもかかわらず、まことに残念ながら諸般の事情により東大執行部が中止の表明をするに至ったことは、別記の通りです。10 年に亘る全国の VUV・SX 研究者の悲願がしばらく白紙状態になってしまいましたことに対して、皆様には大変申し訳なく存じております。

その後は、KEK、SPring-8 などと連携する東京大学放射光連携研究機構を立ち上げ、既存の放射光源施設を活用するプランに移行することになりました。10 年間にわたる建設準備活動の学術的資産を東京大学学内および全国の関連研究者に還元するために、KEK、SPring-8、あるいは海外の第 3 世代施設などに全国共同利用を視野に入れた専用のビームラインの整備を行うというプランです。放射光連携研究機構は、機構長の下に物質科学部門と生命科学部門があり、物質科学部門には物性研軌道放射物性研究施設と全国 VUV-SX ユーザーが寄与し、数本の直線部を PF と SPring-8 に作るようなイメージとなっています。どのような直線部を作るかについて、ワーキンググループ（伊藤、尾嶋、柿崎、木下、小森、辛、大門、藤森、柳下、吉信）を作って懇談会の意見が反映されるように議論を行いました。現在、機構長に尾嶋先生が就任され、建設計画の策定が進んでいます。

これまで数多くのシンポジウムを開催し、VUV・SX 領域では若い研究者が多く育っており、研究の質も高く、層も厚いことが改めて認識されました。彼らのアクティビティーを維持向上させるためには諸外国の高輝度光源に負けない施設が必要でしたが、しばらくの間施設建設の見込みがなくなったことは日本の放射光物性研究にとって大変大きな痛手です。東大の連携機構のプランだけで足りないことは明白ですので、既存の各施設に VUV のビームラインを増強していただくよう要望書を提出いたしました。アジアも含めて諸外国では続々と高輝度光源が建設されている中で、なぜ日本の国力で数本のビームラインしか建設できないのでしょうか？本当に必要なところに予算が行くようなシステムの構築が必要だと思います。VUV・SX 高輝度光源が必要であるという状況は以前にも増して深刻になってきていますので、今後も何らかの方法を模索して VUV・SX 領域の発展に尽くしていきたいと思っています。

＊＊

会長・幹事選挙結果報告

選挙管理委員会　　柿崎明人、吉信　淳、間瀬一彦

会長選挙

開票日：２００６年３月８日（水）
総投票数：９１票
得票数：８６票

結果、信任票を過半数集め、

辛　埴　氏　（東京大学物性研究所　教授）
が、会長に決定。

幹事選挙

開票日：２００６年４月３日（月）
総投票数：１０５票

結果　（５０音順）

幹事氏名	所属
雨宮　健太	東京大学　大学院　理学系研究科
雨宮　慶幸	東京大学 大学院 新領域創成科学研究科
石川　哲也	理化学研究所播磨研究所―SPring-8
伊藤　健二	高エネルギー加速器研究機構 物質構造科学研究所
上野　信雄	千葉大学 大学院　自然科学研究科
太田　俊明	立命館大学　総合理工学研究機構　SRセンター
尾嶋　正治	東京大学 大学院 工学系研究科
小野　寛太	高エネルギー加速器研究機構 物質構造科学研究所
鎌田　雅夫	佐賀大学 シンクロトロン光応用研究センター
木下　豊彦	高輝度光科学研究センター
木村　真一	自然科学研究機構 分子科学研究所
小杉　信博	自然科学研究機構 分子科学研究所
佐藤　繁	東北工業大学　電子工学科
菅　滋正	大阪大学 大学院 基礎工学研究科
大門　寛	奈良先端科学技術大学院大学
高橋　隆	東北大学 大学院　理学研究科
藤森　淳	東京大学 大学院 新領域創成科学研究科
間瀬　一彦	高エネルギー加速器研究機構 物質構造科学研究所
宮原　恒昱	首都大学東京　都市教養学部　物理学コース
柳下　明	高エネルギー加速器研究機構 物質構造科学研究所
柳原　美広	東北大学　多元物質科学研究所
吉信　淳	東京大学 物性研究所

＊＊＊

VUV・SX高輝度光源利用者懇談会幹事会（２００５年１０月）報告

VUV・SX高輝度光源利用者懇談会事務局

平成17年度
第1回VUV・SX高輝度光源利用者懇談会幹事会議事録

日時：平成17年10月5日（水）13：30 ～ 16:45
会場：東京大学 物性研究所 6階 第2会議室

出席者：大門(会長、奈良先端大)、雨宮(東大)、伊藤(KEK-PF)、上野(千葉大)、太田(東大)、 尾嶋(東大)、佐藤(東北工業大)、辛(東大)、曽田(名古屋大)、藤森(東大)、間瀬(KEK-PF)、溝川(東大)、宮原（首都大東京）、柳下（KEK-PF）、吉信(東大)

オブザーバー：上田、柿崎、中村、高木、阪井(以上、東大物性研)、木下(SPring－8)

配布資料：
- 平成16年度第2回幹事会議事録
- SuperSOR高輝度光源利用者懇談会活動報告書
- 賛助会員・企業(2005)、新会員
- 「高輝度光源による先端的バイオ研究シンポジウム」まとめ
- 平成16年度第2回SuperSOR利用者懇談会幹事会議事録
- 柏キャンパス高輝度放射光源施設計画の検討について

報告・議事：

・前回議事録の承認
平成１６年度第2回SuperSOR利用者懇談会幹事会議事録が承認された。

・新会員の承認
大門会長より、平成17年度入会の賛助会員(㈱リコー、キッコーマン株式会社)および会員(7名)の紹介があり、承認された。

・懇談会活動報告
大門会長および吉信計画委員長から、国際シンポジウム「高輝度光源による先端的バイオ研究シンポジウム“Advanced Bio-Science Opened by Third Generation Soft X-ray Synchrotron Radiation」（7月25日（月）東京大学医学部小講堂で開催）について報告があった。

・編集委員会報告
大門会長より、5月にNewsLetter#14が発行されたことについて報告があった。

・極紫外・軟X線高輝度放射光源計画の現状について上田所長より、柏キャンパス高輝度放射光源施設計画について柏SOR計画検討ワーキンググループにおいて本年6月より検討されてきた経過および小宮山東大総長との会談について報告があった。

・平成 18、19 年度　会長・幹事の選挙について次回幹事会を本年度２月までに開催し、検討することとする。

・利用者懇談会の今後の活動方針について以下のような意見があった。
- ○ VUV でまとまり、意見を集約する場にすべきである。
- ○ 世界最先端の研究を行い続ける必要がある。
- ○ 若手育成が急務であり、そのためのアピールが必要である。
- ○ リング建設という究極の目的を維持しながら、今後の計画をどう具体的に展開していくかを検討すべきである。
- ○ 生命科学との二本柱としていくかについて、検討が必用である。
- ○ 今後の目的を明確にし、それを懇談会の名称を刷新するなど目に見える形で表していくべきである。

＊＊

VUV・SX高輝度光源利用者懇談会幹事会（２００５年１２月）報告

VUV・SX高輝度光源利用者懇談会事務局

平成17年度
第1回VUV・SX高輝度光源利用者懇談会幹事会議事録

日時：平成17年12月7日（水）16：30 ～ 18:30
会場：東京大学 物性研究所 6階 第2会議室

出席者：大門(会長、奈良先端大)　伊藤(KEK-PF)　太田(東大)　尾嶋(東大)　小杉（分子科学研究所）佐藤(東北工業大)　辛(東大)　菅（大阪大）間瀬(KEK-PF)　溝川(東大)　柳下（KEK-PF）吉信(東大)

オブザーバー：上田（物性研究所所長）柿崎（物性研究所）

委任状：３通

配布資料：
- 平成17年度第1回幹事会議事録
- 会員手紙
- 幹事会手紙
- 第２回WG議事録
- VUV・SX（SuperSOR）利用者懇談会　会則・細則

報告・議事

・前回議事録の承認
平成１７年度第１回SuperSOR利用者懇談会幹事会議事録が承認された。

・高輝度光源BL計画について
大門寛会長より、前回幹事会後直ちにworking groupを結成し、今後望まれるビームラインと実験ステーションについて議論されたことが報告された。
○　第１回　平成１７年１０月７日
物性研究所　554号室にて
（尾嶋、柿崎、小森、大門、藤森、吉信）
○　第２回　平成１７年１１月９日
物性研究所　554号室にて
（伊藤、尾嶋、柿崎、木下、小森、辛、大門、藤森、柳下、吉信）

・東京大学の‘outstation 計画 working group’による outstation 案について
尾嶋正治氏より、SPring-8、PF など既存の施設を有効利用し、世界最高の性能を目指した outstation 案について報告された。

・施設報告
物性研究所・柿崎明人軌道放射物性研究施設長より、施設報告が行われた。施設内では、１０月末、計画の中止とその経緯について報告するとともに、世界最高の高輝度施設について、PF、SPring-8、海外ビームラインそれぞれの案を現在検討中である。

・平成 18、19 年度　会長・幹事の選挙について
会長より、選挙管理委員として、柿崎明人氏、吉信淳氏（以上、物性研究所）、間瀬一彦氏（KEK-PF）が指名され、承認された。また、次期会長候補として辛埴氏（物性研究所）が推薦された。今後、次期会長・幹事選挙が選挙管理委員により今年度末までに行われる。

・利用者懇談会の今後の活動方針について以下のような意見があった。
○　物性研究所、東京大学の計画を継続して支えていくべきである。
○　世界最先端の研究を行い続ける必要がある。
○　若手育成が急務であり、そのためには、最高の状態で研究ができる環境を整える必要がある。
○　他の施設にもVUVを増やすよう要請していくべきである。
○　VUV・SXだけではなく構造物性を含めて物性物理を考えていくべきである。

＊＊

VUV・SX高輝度光源利用者懇談会 総会（２００６年１月）報告

VUV・SX高輝度光源利用者懇談会事務局

平成17年度
VUV・SX高輝度光源利用者懇談会総会議事録

１．日時：平成18年1月7日（土）13：00 ～14：00
２．会場：名古屋大学　IB電子情報館　２階　A会場
３．出席者：36名（委任状は47通で総会は成立）
４．回覧資料：国際バイオシンポジウム冊子、News Letter #14
５．報告・議事
　１）議長に尾嶋正治氏（東大工）を選出した。
　２）大門寛会長（奈良先端科学技術大学院大学）が高輝度光源計画の中止、1995年設立当初からの本懇談会の活動の概要について報告した。
　３）吉信淳計画委員長（東大物性研）の代理で、大門会長が平成17年中の活動報告を行った。-----7月25日（月）に東京大学医学部小講堂において、高輝度光源による先端的バイオ研究シンポジウム“Advanced Bio-Science Opened by Third Generation Soft X-ray Synchrotron Radiation”が東京大学放射光科学推進懇談会と共催で行われた。
　４）谷口雅樹編集委員長（広島大）より、News Letter #14を発行したこと、次号News Letter #15を発行予定であることが報告された。
　５）柳下明会計委員長（ＫＥＫ）の代理で大門会長が会計報告を行い、承認された。
　６）柿崎明人軌道放射物性研究施設長が、高輝度光源計画が中止にいたった経緯と今後のアウトステーションビームライン計画について説明した。
　７）尾嶋氏より、東京大学ワーキンググループにおいて、アウトステーション計画が現在検討中である、という報告があった。
　８）大門会長より、今後の懇談会のあり方について説明があった。
　　・引き続きVUV・SX高輝度光源利用者懇談会として本会を存続し、VUV・SXを用いて物質科学研究を行う全国組織として、VUV・SXアウトステーションビームライン計画の後押しや、全国視野に立ちVUV・SX光を利用できるビームラインの増強を実現していくことを目的とする。
　　・３月までに新会長信任投票・幹事選挙を行い、来年度より新体制で再出発する。
　　・研究会をこれまでどおり行い、VUV・SX放射光科学の発展を目指すとともに、会員相互の交流の促進を図る。
　　・ホームページを刷新し、メーリングリストによる情報伝達、意見交換を充実させる。
　９）以上の説明に対して、以下の意見があった。
　　・本懇談会の位置付けと会則を見直すべきである。

＊＊

VUV・SX高輝度光源利用者懇談会幹事会（２００６年５月）報告

VUV・SX高輝度光源利用者懇談会事務局

平成18年度
第1回VUV・SX高輝度光源利用者懇談会幹事会議事録

日時：平成18年5月9日（火）13：00 ～ 16：15
会場：東京大学物性研究所 6階 第2会議室

出席者：辛(会長、東大物性研)　雨宮健(東大)　雨宮慶(東大)　伊藤(KEK)　太田(立命館大)
尾嶋(東大)　小野(KEK)　木下(SPring-8)
木村(分子研)　佐藤(東北工業大)
大門(奈良先端大)　藤森(東大)　間瀬(KEK)
宮原(首都大東京)　柳下(KEK)
柳原(東北大)　吉信(東大物性研)
オブザーバー：上田(東大物性研究所所長)　柿崎(東大物性研)

配布資料
- 平成17年度第二回幹事会議事録
- 平成17年度総会議事録
- 平成18、19年度会長・幹事選挙結果報告書
- 平成17年度会計報告書
- 「高輝度光源施設計画の中止について」
- 「東大放射光アウトステーション構想について」
- VUV・SX高輝度光源利用者懇談会　会則・細則

報告・議事
- 議事に先立ち、上田東大物性研究所所長から挨拶があった。

- 前回議事録の承認
  平成１７年度第二回VUV・SX高輝度光源利用者懇談会幹事会議事録、平成17年度総会議事録が承認された。

- 平成18、19年度　会長・幹事選挙について
  柿崎選挙管理委員（東大物性研）より、平成１８、１９年度の会長・幹事選挙結果について報告され、承認された。

- 平成17年度会計報告
  柳下会計委員長より、平成17年度の会計報告が行われ、承認された。

- 施設報告
  柿崎軌道放射物性研究施設施設長より、東京大学の高輝度光源施設計画の中止について報告された。また、軌道放射物性研究施設加速器グループでは、現在、原研・KEKが共同開発しているERLプロジェクトに参加していることが報告された。

- 東大放射光アウトステーション計画について
  東京大学放射光連携研究機構長の尾嶋氏より、東大放射光アウトステーション構想についての報告が行われた。

- 今後の活動について
  ○　東京大学の高輝度光源施設計画の中止、そして、今後の計画とその進行状況を逐次会員に報告する。その上で会員の意思の確認を行っていくことが重要である。
  ○　東京大学の高輝度光源施設計画の中止により、会則の見直しが急務である。
  ○　特に、第１章の第１条、第２条は、懇談会の目的を明確にし、会員相互の理解を図る上で非常に重要であるため、今後幹事間で検討し早急に会員に報告することとする。
  ○　ニュースレターNo.15を発行し、東京大学の高輝度光源施設計画の中止、今後の計画の報告、懇談会の新会長・幹事の紹介を行う。

・　自由討論

以上の報告を受け、以下のような意見があった。

○　東京大学の高輝度光源施設計画が中止されても、新たなアウトステーション計画に協力していけるよう、懇談会を存続すべきである。

○　懇談会の立場を明確にするべきである。東京大学は柏キャンパスの高輝度光源施設建設を中止したが、懇談会としては、アウトステーション計画を活動の中心にしていくべきではないか。

○　東京大学の計画の中止などの状況により、名簿の改訂を行う必要がある。

・　委員長選出

新幹事の中から、平成１８、１９年度の委員長が、辛会長により指名され、承認された。

計画委員長　吉信　淳（東大物性研）
会計委員長　柳下　明（KEK－PF）
庶務委員長　尾嶋正治（東大工）
編集委員長　藤森　淳（東大新領域）
会計監事　　宮原恒昱（首都大学東京）

（議事録　事務局）

＊＊＊

平成１７年度会計報告

平成１７年度会計委員長　**柳下　明**（物質構造研究所・放射光研究施設）
平成１７年度会計監査　　**宮原　恒昱**（東京都立大　理学研究科）

	収入金額	備　考
前年度より繰り越し	1,245,216	
賛助会費	550,000	1口　50,000円（下記参照）
会議費	27,000	懇親会会費
雑収入	12	銀行利息
合計	1,822,228	

	支出金額	備　考
印刷出版関係費	74,813	News Letter 印刷費（800冊）
会議費	187,591	会議費、お茶代、アルバイト代
通信費	155,010	郵便、宅急便
旅費・交通費	5,400	幹事、研究会参加者旅費
事務局経費	63,295	銀行手数料、事務局交通費
雑費	32,776	放射光学会購読会費、文房具
合計	518,885	
差引残高	1,303,343	

1口（５社）・・・真空光学（株）、清水建設（株）。三菱電機（株）、㈱リコー、キッコーマン㈱
2口（３社）・・・信越化学工業（株）、　（株）トヤマ、　（株）日建設計

2006年3月31日現在

＊＊＊

連携機構開設シンポジウム開催のお知らせ

東京大学放射光連携研究機構開設シンポジウム
「放射光科学の新しい展開を目指して」

日時：　２００６年６月２１日（水）　１３：００～１７：００

場所：　東京大学武田先端知ビル５階武田ホール

参加費：　無料

〈プログラム〉

13:00～13:10　あいさつ　小宮山宏　総長

13:10～13:30「放射光連携研究機構の概要」　尾嶋正治（工学系研究科教授）

13:30～14:00「スピン超構造物質科学」　十倉好紀（工学系研究科教授）

14:00～14:30「放射光による触媒化学・表面科学の新領域」　岩澤康裕（理学系研究科長）

14:30～15:00「生体物質の電子物性」-生命科学と物質科学のシナジーを目指して-
辛　埴（物性研究所教授）

15:00～15:30 休憩

15:30～16:00「放射光が明らかにするカルシウムポンプのイオン輸送機構」
豊島　近（分子細胞生物学研究所教授）

16:00～16:30「放射光Ｘ線結晶構造解析で明かす蛋白質の輸送と修飾」
若槻壮市（高エネルギー加速器研究機構教授・新領域創成科学研究科客員教授）

16:30～17:00「分子モーターの機能と作動機構」
-分子生物学、分子遺伝学、構造生物学的アプローチ-　廣川信隆（医学系研究科長）

17:00～17:10 あいさつ　岡村定矩　理事

17:30～19:00　懇親会＠武田ホール前のホワイエ

主催：東京大学放射光連携研究機構

共催：東京大学放射光科学推進懇談会

VUV・SX高輝度光源利用者懇談会

詳細はhttp://www.issp.u-tokyo.ac.jp/labs/sor/button/symposium.pdf

＊＊

編集後記

今回、初めてNews Letterの編集委員を担当させていただきました。編集にあたり過去のNews Letterを参考にさせていただきましたが、そこで１９９６年６月に第１号が発行され、この号でちょうど１０年目に当たることに気づきました。１０年という月日の間、高輝度光源施設実現への熱い想いを発信し続けてきた重みを感じます。そして今回は、高輝度放射光施設計画の中止からアウトステーション計画へ、という大きな方向転換を皆様にお知らせする号になりました。大きな節目の号に携わることになり、微力ながら、これからの情報発信にも貢献させていただければと思います。執筆者の先生方にはお忙しい中ご協力ありがとうございました。

東京大学大学院
新領域創成科学研究科

吉田　鉄平　（編集委員）

～お願い～

所属の変更された方は、住所・Tel番号・Fax番号・Ｅ－MailアドレスをVUV・SX高輝度光源利用者懇談会事務局までお知らせください。

編集委員名簿

委員長 藤森　淳（東京大学大学院新領域創成科学研究科）
委員　吉田鉄平（東京大学大学院新領域創成科学研究科）

発行

VUV・SX高輝度光源利用者懇談会
ニュースレター編集委員会
〒277-8581　千葉県柏市柏の葉5-1-5
東京大学物性研究所軌道放射物性研究施設内
VUV・SX高輝度光源利用者懇談会事務局
TEL：04-7136-3406
FAX：04-7134-6083
E-mail: vsxscrt@issp.u-tokyo.ac.jp
http://www.issp.u-tokyo.ac.jp/labs/sor/vsx/community/